吉野作造の平和論

田畑　忍

(一)

吉野博士の名は、民本主義の唱導者として周知されている。それは、彼が、大正年代に、デモクラシーを民本主義と訳して用い、かつこの民本主義を強調した人物だからである。彼は、最初、これを「主民主義」と呼び(明治末期)、のち「憲政」の根抵という意味で「民本主義」と呼んだ。もちろん民本主義と言う表現は、民主主義一般を意味するものとしてでなく、当時の日本の現実に即して、民主主義中、とくに日本の憲政の根抵たる立憲主義を意味するものとして用いられたのである。

彼の論壇登場は、すでに明治末期に始っているが、その活躍は十数年以上も続いて、其の死の時に及んでいる。彼を先ず有名にしたのは、大正五年一月の「中央公論」に発表した「憲政の本質を説いて其有終の美を済すの道を論ず」という時事論文である。しかし民本主義という論題をつけたのは、丁度二年後の大正七年一月の「中央公論」に発表した論策であって、それは「民本主義の本義を説いて再び憲政有終の美を済すの途を論ず」というのである。さらにのちには、デモクラシーという原語をそのままに使用するようになり、また「民

主主義」と言う訳語を用いるようになったのは、共産主義の主張や紹介が盛んになり、それにつれて、ファッシズム的勢力が抬頭して、明治的民主主義が危機に瀕するようになった昭和になって以降のことである。(田中惣五郎『吉野作造』参照)。

民本主義の二つの論策で彼が主張しているところは、少数の哲人の思想が、民衆の与論によって支持される政治、すなわち日本の場合については民を本とする立憲君主政にほかならない。而して、其の実現の方法として提唱したものが、普通選挙論であり、下院尊重論であり、議院内閣制論である。従って、これらの民本的諸制度を阻んでいる貴族院・枢密院・元老そして軍閥を、彼は言を極めて攻撃したのである。そして、本来ならば、その廃絶すべきであることを直言し、現実の問題としてはこれを改革すべきしとする改革論を展開したのである。すなわち、彼の民本主義の主張は、理想論ではなくて現実的な政策論である。すなわち、かくの如き論策として、『軍部改革論』『枢密院改革論』『貴族院改革論』の三部作がつくられている。何れも、時代の要求に合致した改革論たるところに、その主張が一世を風靡した一つの理由を見出し得よう。『我国憲政の解剖』『我国憲政の畸形的発達』『言論及び思想の自由に就て』等の諸論策もまた、その民本主義論を構成するものである。

当時、彼と並んで、いわゆる大正デモクラシーの論陣を張った人々には、大山郁夫・長谷川如是閑・今井嘉幸・佐々木惣一博士・室伏高信・内ケ崎作三郎等があるが、彼と大山郁夫が論壇の双璧で最も華々しい存在であった。しかし、彼の唱えた政策論としての民本主義論は、高い調子のものではなく、新鮮なものでもなく、また尖鋭なるものでもなかった。むしろ、理論としては曖昧さを含み、政治思想としては保守的傾向の強いもので

あった(林茂『近代日本の思想家たち』参照)。従って、大山郁夫・室伏高信等を批判した山川均が、この点を、鋭く論難したのは当然とも言える。すなわち山川均は、吉野の民本主義論は、デモクラシー論ではなく、また民本主義論でもなくて、ただの普通選挙論であり、参政権拡張論にすぎないものである、と攻め寄ったのである(山川均「民主主義の煩悶」にかんする住谷悦治「大正デモクラシーと山川均」参照)。

(二)

もちろん、山川均(同志社)の吉野批判は、キリスト教的人道主義から出発したマルクス流の社会主義的立場からなされたものである。しかるに、其の研究生活をヘーゲルの研究から始めながら、全然マルキシズムの研究に進まなかった吉野博士の民本主義論は、山川の批判に堪え得るものではなかった。当時の大山郁夫の思想も、グンプロヴィッツに基調したデモクラシー論にすぎなかったから、方法論的に言って格段の差のある山川均の敵ではなかった。元をただせば、山川・大山・吉野の三者は、何れもすべて、キリスト教の思想につながるものであるが、山川はすでにキリスト教を離れて遠き存在であり、大山またのちにラッツェンホーファー、クラッベ等を経てマルキシズムに行きつくことになり、輝やける労農党首領にもなった人物である。しかるに、吉野博士のみは、生涯(昭和八年逝去)、キリスト教的人道主義の思想と信仰とを墨守する実践的学究として終始したのである。ここで実践的というのは、彼が象牙の塔に立てこもることなく、常にめざましい言論的活動をつづけたことや、東大学生の「新人会」を指導したり、或いは大山・長谷川とともに雑誌「我等」をつくり、

或いは「明治文化研究会」を組織し、或いは社会事業団体「賛育会」の世話をし、或いは社会民衆党の産婆役をつとめたりしたことなどの活躍を指すのである。

青年(高校生)の吉野をキリスト教の信仰に導いたものは、仙台のブゼル女史であったが、のち東大に進学して以降は、本郷教会の海老名弾正牧師(同志社・東大)が、其の信仰の育て親になっている。それ故、吉野博士の政治思想も、もっぱらキリスト教主義の上に於て成長する運命をもっていた。それ故、一木喜徳郎教授(東大)から受けた国法学の知識も、また小野塚喜平次博士(東大)の近代的な政治学の講義によって啓発された自由主義思想も、穂積陳重博士(東大)の法理学も、また浮田和民博士(同志社・早大)の「太陽」誌上の自由主義的論策も、そのすべてが彼をキリスト教的自由主義者として仕立て上げることに役立ったのである。

すなわち、これを要するに、吉野博士の民本主義の論策は、キリスト教的自由主義論に基調する政策論にほかならない、と言える。それに若干の社会主義思想が加味されるにいたった程度のものである。この社会主義思想もまた、安部磯雄・木下尚江等のキリスト教的社会主義思想の影響によるものであって、それ以外のものではない。殊に彼は、安部磯雄(同志社・早大)を尊敬し、その社会主義思想に傾倒した。けれども、深く社会主義を究めるにはいたらず、せいぜいシエッフレを読んだぐらいにすぎなかったのである。従って、階級斗争史観についての理解にも乏しく、其の社会改造論は不徹底なものに終っている。しかし、彼の社会改造運動・労働運動・無産政党運動に対する寄与貢献、そして熱情を看のがすことは決してできない。

彼はまた、安部磯雄・木下尚江・内村鑑三のもっていた徹底的な平和主義思想に共鳴しながら、しかもこれを直ちに自らの思想とするにはいたらなかった。すなわち彼の民本主義論は、インターナショナリズムに当然

の結びつきをもっているけれども、しかし安部・木下・内村の如き非戦論・軍備撤廃論としての平和主義思想を容れ得なかったのである。一言にして言えば、それは、山川批判がこれを曝露しているように、彼の民本主義論が不徹底で、立憲主義論を新しい言葉で言い直した保守主義の理論にすぎなかった、ということに照応するものである、ということができよう。

換言すれば、吉野博士の民本主義論は、結局は、其の師・海老名弾正のキリスト教的自由主義思想の枠を一歩も出でないものと断定することができよう。それ故、彼の思想は、山川均・堺利彦等に対してはもちろん、木下尚江よりも、内村鑑三よりも、浮田和民よりも、安部磯雄よりも、遙かに穏健なものであった、と言うことになるのである。が、彼の特色は、その穏健で平凡で至極く当然の民本主義論を、歯に衣きせぬ強い言葉と高らかな調子とで、しかも東大と中央公論と朝日新聞とを牙城として、絢爛と展開して、反動的侵略的であった軍閥官僚の政府を極力攻撃した事にある。そして、其の言論的成功は、けっきよくは、真摯にして民主的良心的な其の人柄の故であった、と私は見るのである。もっとも、このことは、大正デモクラシーを担って立った他の若干の人々についても同様に言い得るところである。しかし彼が、其の思想の穏健かつ保守的であったのにもかかわらず、軍閥と右翼の「浪人会」等から特に狙われ、そして迫害された原因または理由は、彼の主張が、常にそのように強く鋭い明言調に於てなされたという点にあった、と言っても過言ではない。そして、彼の生涯を通して、其の民本主義の敵は、常に国家主義と官僚主義とであったが、しかも国家権力から、彼が直接に断圧を受けることはなかった。もっとも一度、筆禍の厄に会いかけたこともあったが、結局は事無きを得ているのである。

(三)

すでに述べたように、吉野博士は国際主義を主張する平和愛好家であって、平和主義者（パシフィスト）ではない。彼は軍備縮少を唱えるけれども、未だ軍備撤廃を唱えることがなかった。彼は軍閥と武官専任制と軍令とを攻撃し、軍国主義を非難するけれども、未だ軍部そのものの廃棄を考えない、ただ単に「軍政改革論」を展開したるにすぎない。彼は侵略主義と侵略的出兵に極力反対して、「対外的良心の発揮」を主張するけれども、未だ戦争廃止を主張することはなかった。故に、彼はパシフィストではなく、単に「民主的国際主義」を主張し、それを空想ではなく、すでに現実の政治家ウイルソンが叫んでいる現実なのだとする現実的平和愛好家たるにすぎなかったのである。すなわち常に目前の現実に着眼して、政策を論ずる政論家たる吉野博士は、木下尚江・安部磯雄・内村鑑三等に類似する平和主義的理想家ではあり得なかったのである。まさにそれは、海老名弾正的限界であった、と言わなければならない。要するに彼は、キリスト教の信仰をもった現実の歴史家であり、政策家ではあるが、久遠の理想を追求する哲人または歴史哲学者ではなかったのである。若き日に、一度び其の性格と相容れざるヘーゲルを学んで、しかもヘーゲルを棄てて顧みなかったことも、而してまた遂にカントに学ぶところがなかったことも、このことを傍証することになるであろう。

上記の如き傾向の吉野博士の平和にかんする論策として挙げるべきものは、『対外的良心の発揮』（大正八年）・『軍備縮少論』（大正七年—十一年）・『民主主義と軍国主義』（大正七年）・『民主的国際主義は空想的世界観なりや』（大正七年）・『果して帝国は危機なりや』（大正六年）・『所謂出兵論に何の合理的根拠ありや』（大正七年）・『日米

共同宣言の解説及び批判』(大正六年)・『軍部改革論』(大正六年―大正十一年)等であろう。

これらの諸論策に於て、彼の主張する平和思想は、「武力そのもの」を否定するのではなく、「武力による支配の否定」を基調とする道義的民主的国際主義にほかならない、と言えよう。すなわち、その平和思想も、「武力の支配を否定する」が故に、必然に軍備縮少論の評価と主張をすることになるのであるが、しかし「武力を否定するのではない」から、軍備撤廃論にはならないのである。また、軍国主義の強き攻撃をするけれども、軍国であること自体を問題とはしないのである。ドイツと日本の国家主義を論難することは極めて峻厳であるけれども、国家権力と権力主義が消滅するであろう国家以上の社会的発展の段階を考えようとはしないのである。結局、その平和論は、米国の大統領ウイルソンのデモクラシーの主張と国際主義への共鳴であり、それを支持する程度を出でないものであった、と言わねばならない。しかし、其の国際主義または国際協調主義への共鳴、日本の対支干渉侵略に対する論難と道義外交の主張、ドイツと日本の国家主義・軍国主義に対しての攻撃・軍備縮少・軍閥攻撃等の主張が、すべてヨーロッパ第一次世界戦争を背景とする民主主義勃興期の世界思潮に立脚して、ピントの合った狂いなき通俗性をもった時事評論であったことは、何人もこれを否定することができないところであろう。

(四)

吉野博士の戦争と平和観は、彼が、ウイルソンの民主的国際主義に共鳴し、福田徳三博士の国家主義を駁論

するために書いた『民主的国際主義は空想的世界観なりや』に於て、次の如くに述べられている。曰く。

「一体戦争は利害の衝突から起る。従って平和は利害の調節によって、齎らされなければならない。併し乍ら、利害の調節は事実上不可能である。調節し得るものであるならば、初めから戦争にはならない。而も利害の調節によって平和を見ざるべからずというものは、戦争に伴う一大矛盾である。其処で従来の平和は一方の意思が他方の意思を、全然屈服するか、或は双方が疲れて、此の上奈何ともする事が出来ないというので、第三者の周旋を機会に不徹底の妥協を為すによって治りがついた。斯くの如きは、固より争いの根本的解決ではない。これ、従来、世界の平和が一日も安全に保障されなかった所以である。其処で、何とかして世界永久の平和を保障するの途はあるまいかと、昔から多くの志士仁人は攻究を重ねたのであるが、奈何せん実際世界に於ては、虎視耽々互に武備を競うの有様であったから、平和論は即ち紙上の空論に属し、実際家の省る所とならなかった。然るに今度の戦争になってから、之では堪らぬと実際家も気が附いて、戦争は何とかして、戦争の機会が絶対にないように或は著しく少くなる様にせなければならぬという事に意を用うる様になった。而して実際政治家の中で此種の立場から、一方が他方の意志を屈服し、戦勝の上に平和を来らせんとする在来の俗説に疑を挾み、国家間の具体的利害の衝突に超越して、何等か抽象的主義を求めて、之によって戦争を罷め平和を打建てんとするの思想に最も早く着眼したのは、米国大統領ウイルソンであると思う。彼が嘗て「勝利なき平和」を提唱して、交戦国双方の間に、周旋を試みんとしたのは、畢竟此の趣意に出づるものである。…予輩は此の点に於て、彼の一世に卓越する政治実たることを認めた。けれども其の後の事情は遂に米国をして参戦せざるを得ざるに至らしめた。「勝利なき平和」の主張者が一転して、飽まで独逸を打破する事によっての

み、世界平和を克服し得べしとするのは大なる矛盾たるが如くにして、実は其の間に一貫の理論あるを認むる。……吾人は米国の大統領が今日尚一定の抽象的理論を掲げ、之を承認するならば、何時でも、干才を収むるといふ態度をとって居る事を、明にすれば足る。而して彼が抽象的の主義によって、戦争を終結し、将来の平和を樹立せんとするの思想が、もう一層極端に同一の目的を達成せんとする革命露国の態度によって、更に深く刺激せられた事は言うを俟たない。尤も米国の思想は、露西亜のそれの如く、徹底を欠くの嫌はある。然も又徹底を欠くだけそれ丈け各国家の実際的利益を全然無視しないという点もある。……彼に理論の徹底を責むるは無理である。此点に於て、予輩は戦争の目的並びに、講和条件に関する抽象的主義の宣明に関しては、革命露国の主張を採らずして、米国大統領ウイルソンのそれを採る。ウイルソンの説を行はしむる事が大体に於て、世界共同の利益であり、又世界の一員としての日本の利益である云々」。

我々は以上の引用に於て、吉野博士の平和論の穏健性・不徹底性・通俗的な実際性を如実に見ることができる。そして、それは、その民主主義論が、理想を構え乍ら、不徹底な現実的政策論乃至改革論に終っているのと、全く同巧同曲であることを指摘すべきであろうと思うのである。

(五)

このように、理想を考えながら、しかも現実主義の立場をとっている吉野博士が、軍備撤廃論者でなく、軍備もまたやむを得ないとしていることは、次ぎの引用によっていっそう明白であろう。曰く。

「今日のような国際生活の下に於ては、如何なる国にとっても軍国的施設の欠くべからざるは論を俟たない。唯軍国的施設経営の根本方針は、之を夫自身の目的とするに置くべきや又は之を他の目的の手段たらしむるに置くべきやは、慎重に考慮すべき重大な問題である。主観的に云へば世界的協同生活に関する理解如何の問題であり、又客観的に云へば当該国民の品格に係はる問題である」。

また「今日の時勢に於て、軍国的施設経営は絶対に之を欠く事を許さない」と言い、「而して之を……平和的大理想によって指導せらるべしとするのは、それは今日明日に発展しつつある所の民本主義の潮流と、恐らく何等著るしき衝突を見る事は無かろう」とも言っている(以上、吉野『民本主義と軍国主義』参照)。これによって、彼がパシフィストでない理由が極めて明瞭にわかる、と言えよう。また彼は、ソ連の「絶対的平和主義」を批判して、次ぎのように言う。「絶対的平和主義は世界の総ての国乃至人類が残りなく協同の確信を有するに至れる時に云うべきである。一人でも競争の主義を奉ずるもののある以上は、世界は常に不安に襲はれる。例を軍備制限の問題に採らんか、軍備の制限は差当り世界の平和を保障するに足る最も有力な方法であるけれども、併し斯くの如きは全員一致でなければ実行は出来ない。……否、更に進んで其の全体と歩調を合せざる者に向って強制の手を加うるの必要を見るだろう。……斯くして英米の軍国主義は発生したと見なければならない。故に結局に於て平和を理想とする国に於ても、其の平和を確実に齎らす為めの手段として軍国主義をとるという事はあり得る」(前掲論文)。そして彼は、このような軍国主義は、これを容認せざるを得ないとするのである。それはいわば力による平和の肯定である。すなわち、かくの如き彼の平和論が絶対的平和主義であるとすることはできないのである。

要するに、吉野博士の軍備縮少論は、右の如き一種の軍国主義論に基調する。故に、彼の『軍備縮少論』（大正七年―十一月）の論拠は、決してサンピェールやベンタムやカントのとっている軍備縮少論ではない。米国英国等が当時国際政策として唱えた不徹底なるウイルソン的軍備縮少論である。而して、その主張のきっかけになっているのは、帝国議会に於ける尾崎行雄の「軍備縮少決議案の提案」と、それが否決されたことにあった。すなわち彼は、尾崎の提唱に共鳴し、それを否定した帝国議会の政治家たちの不誠意と不見識とに腹を立てて、長編の論策を試みるにいたったものである。すなわち彼は、軍備の拡張が国民の生活を脅やかすものであり、かつ戦争を招来するものであるとする見地に立って、英米流に、平時兵力充実主義の政策を排し、彼のいわゆる「軍備縮少の徹底的主張」をしたのである。しかし、それは徹底的な軍備縮少の主張ではなく、「不徹底な軍備縮少」の「徹底的な主張」にすぎなかったのである。

かくしてまた彼は、このような軍備縮少的平和論に立脚して、軍部改革論・日米親善論・日支親善論・朝鮮統治政策批判の論策を展開し、大谷光瑞の侵略的軍国主義と大亜細亜主義に対して及び寺内内閣のシベリヤ出兵に対して、強い反対を唱えたのである。「対外的良心の発揮」という言葉ほど、吉野博士の民主的国際主義と平和論とを言い得ている表現はないであろう、と私は思う。

それ故、彼をして若しも新憲法の今日の段階に生存せしめ得たならば、必ず躊躇することなく、日本国憲法第九条の規定によりて国家的現実となれる絶対的平和主義に共鳴して、其の改悪の計画に対しては、最も頑強に反対を叫びつづけたであろうことは、其の現実に立脚したキリスト教的人道主義と真摯なる其の人柄とから言って、まことに当然のことと思われるのである。

(六)

吉野作造の人柄については、其の尊敬していた新渡戸稲造博士の「使命を帯びた人」であるという評価の言葉が、思うに、いちばんぴったりとしている。しかし、日本の当時の現実は、彼にその使命を十二分に果すことを許すようなものではなかった。そして、戦後の日本は、彼のような性格の人物が、政治家(宰相)となって、使命を大いに果すことのできる時期であったが、天は彼に長命を許さず、その機会を与えなかった。この意味で、彼は「使命を帯びて、しかもこれを果すことのできなかった人である」と言うことができよう。

それにもかかわらず、大正年代に民本主義を唱えた彼の名前は、日本の政治思想の歴史に於て不朽であることを疑い得ない。そして、それよりも、彼の強く正しくあった人間性を直接に知る人々が、すべてこの世を去ってしまった後に於ても、彼の政治思想の根底をなしている「強き善人」たる性格を語り伝える人々は絶えないであろう。私は彼の友人の一人であり、そして人物評点の極めて辛い佐々木惣一博士が、「吉野君は偉い。おそらく吉野君を偉大にしたものはキリスト教の信仰であるだろう」と、常に吉野博士を激賞されていたことが、実は耳にこびりついているのである。

私は、身体的に倭小で、しかし精神的には偉大であった吉野博士を想う度毎に連想するのは、同似の英雄横井小楠(幕末明治初年)と小野梓(明治初期)の二人のイメージである。それぞれの進歩的な性格と思想は、もちろん三人三様である。そして、進歩性と徹底性とに於ては、横井と小野がむしろ、吉野博士に確かに勝っている

と思う。しかも、私の心を最も強く打つものは、大西郷の偉大なる性格にも似通った吉野博士其の人であることを告白しなければならない。私は、彼の性格は、彼の思想にまさって美しい、と思うのである。